

鹿児島県国語教育史資料——その三——

「磯長武雄研究ノート」資料補遺②

新名主 健 一

(一九九四年十月十七日 受理)

A Second Supplement to "A Study of Isonaga Takeo"

Kenichi SInmiyōzū

I 短歌 (「磯長武雄研究ノート」・「磯長武雄研究ノート」資料

補遺) 中の「和歌」は「短歌」に改めることにする)

四百萬大事業は武蔵野を埋め盡して更に擴がる

地下鐵の電車の中に花束の嬌態を見する斷髮の女

つばくrame岬の春に歸り來て空に狂ひ飛ぶ花曇りなり

古帽子ぼろ洋服のチャップリンは人の一生の戲畫の映出

草しきて語る言葉もしんみりと峠の雲雀雲に入るなり

(大正十四年八月二日女子興業學校記念館 潮音社十周年記念大會)

(大正十四年三月二十七日唐湊温泉場縣下潮音社友春季大會での短歌)

「磯長武雄氏追憶」平國隆義(「山茶花」第十一卷第十二號 磯長武雄追悼号)昭和十三年十二月 十五頁 所収)

向日葵の花の素枯を抜すて、植うるものなき庭のある哉

壁超へて小松ののぞく裏小町昔ながらの道なりしかな

鶏の聲つぎつぎに鳴きかはし夜明けおもしろき頃となりたり

直觀の絶對性の果てにくるものの姿をわれは見んとす

鶏ら刈田にいでて秋ふかく新稔の香のほふ道なり

朝かけを待ちてひろげし新藁のにはひは既に冬のものとなる

この頃の朝の目ざめにおどろくは時雨にまがふわくら葉の音

夢となく咽ぶ涙はせきいでて夜明けの冷土に凍りたるかな

夢にさへわれを泣かする思ひ出はその涙もて拭ふべきなり

「山茶花」(第一號 昭和二年十二月) 所収

いま掃きし庭の白洲の掃き目をなほひきたつる鳥の足跡

「山茶花」(第三號 昭和三年二月) 所収

満開の櫻見に来てふるさとの山を見てゐるあはれなる身は

「山茶花」(第八號 昭和三年七月) 所収

なまなまと海月を濱に打上げてうねりは太し秋の外海

「山茶花」(第九號 昭和三年八月) 所収

藁すぐる秋の日ぼこり石路の花にしみらにふりかかりつつ

「山茶花」(第十一號 昭和四年十月) 所収

青山の土となりた祖父の墓をかい撫でてただに泣かるる

「山茶花」(第四卷第四號 昭和六年) 所収

叛逆兒青年學徒の皆もてる山の泉のごとき純情

「山茶花」(第四卷第五號 昭和六年五月) 所収

晝飯の空腹に喰ふ乾麵包ぱりぱりとして口にこわばる

「山茶花」(第四卷第七號 昭和六年十月) 所収

酒甕の居据る土間のうすあかり冷えびえとして秋はただよふ

「山茶花」(第四卷第八號 昭和六年十二月) 所収

花ぐもりはてしもわかず三千里いざよふ魂をわれら呼ばへる

「山茶花」(巻・号不明 昭和八年四月) 所収・昭和八年四月三日  
濱田良夫追悼歌會での歌

パラシュートに似てぽっかりと噴煙は白くあがりをり秋の櫻島

この街の汚物をながす下水道は海につづきて遠く吐き出す

飢かはくのんどうるほす水道の水はだぶだぶと腹にたまれる

舗装路の夕べは涼しわが靴のしめりよきほどの水撒きにけり

八衢をなだれていゆく人ごみの中に聞きたり金庫のあく音

地下室の電燈の中に水仙は冴え冴えとして水をあげをり

おしつまる師走の街にまぼろしの如くあらはれて消えし自動車

本町の兩側店は師走なほひっそりとして格子に日のさす

大晦日街の債鬼はざらざらと眼を光らせて裏通りを行く

ガス燈をつけし夜店のうす明りどの商人も疲れし如し

「鹿児島教育」(昭和十二年二月號 所収)

谷ふかく山にこだまするダイナモの爆音太し春立たむとす

リヤカーに妻子をのせて野歸りのこの友にわれ帽子をあぐる

螢火の青き光りはあぢさゐの花に照る時大きかりけり

「山茶花」(巻・号不明 昭和十三年四月) 新萬葉集に採録された  
歌

カッフエの女も出でて日蝕を見てゐることが何かあはれなり

丸之内朝あけがたのビル街にほうり出されしごとく佇む

春の光降るがごとくにこぼれたり屋上グラウンドの子供と熊

干物をたたみて縁に揃へたる静かさはけふの心にふれぬ

肉弾となりて死にゆく將兵はいく人か知らず軍は全し

戦勝の聲よ空谷にこだまして日は落ちゆけり萬里の長城

戦のことにとらはれてゐるわれか聯想をよぶ土手の彼岸花

先生の期待に添はぬ平凡の生涯ながらおのれを恥ぢず

焼跡の黒野の土にもえいづるわらびを思へ何をなげかん

「故磯長武雄氏の横顔」東田喜隆（「山茶花」第十一卷第十二號  
昭和十三年 磯長武雄追悼號 所収 発表年不明）

賀川直子（磯長氏夫人）

戦死

大君のみ楯となりていさぎよく散りませし命何を嘆かむ

夢ならぬ公電を手にますらをのいのちの際を想ひまゐらす

名に恥ぢぬ大和ざくらの散りぎはをたのみて今宵<sup>なましず</sup>靈鎮めする

天かけり還り來ませる英靈をただねむごろにねぎらひ申す

歌一つわれに給ひて大陸に驥歩をす、めし夫はかへらず

（注・出征に際し夫人に残した短歌 花鉢を撫しつつかおもふ大

陸に驥歩をすすむる一人となりぬ 磯長武雄）

いとけなき吾子が靈前にともす灯よ拍手よ今宵われを泣かしむ

靈前に心澄ませてぬかづけばたのむぞと夫のこゑがきこゆる

ぬかづけば涙こぼる、かなしみにうち堪へ抜きて生きむと誓ふ

はせつけて弔詞を賜ふ友情のあつきところに泣かされてゐる

よき友を持ち給ひたりねむごろに弔詞を文を歌ひ賜ひぬ

陣中の歌草いくつ残りぬむ遺品のことにはさびしくふれぬ

秋の夜は夫がかたみのひとり子に力湧き來て慰めらるる

えにしありて再びここに逢ひまつる勇士<sup>ひと</sup>とはしづかに語り給ひぬ

（大坪伍長殿）

あふれ來る涙かみしめわが夫のいのちのきはをしみじみと聞く

いかばかり無念のうちに果てにけむただ一發の敵弾を恨む

わが夫の最後をきかせたまひつつ言葉とぎれし白衣の勇士

こまごまと夫の最后をかきつらね給ひし文は世にし傳えむ  
月夜道吾子が手を引き地の果もいゆかば夫に逢はむかと想ふ

「山茶花」(第十一卷第十二號 昭和十三年磯長武雄追悼號 四頁  
所収)

II 「山茶花」(昭和十三年十二月號 第十一卷第十二號 磯長  
武雄追悼号) 目次

山茶花 十二月號 目次

卷頭言	安田 尙義 (二)
挽歌	賀川 直子 (四)
靈は歸る	賀川 直子 (五)
武雄歌論序説	前原 東作 (六)
山茶花短歌	(八)
安田 尙義	齋藤 文雄
丸田 一彦	上野 良一
池田 稻子	東田 喜隆
	古河 ふく
	中尾 明義
	吉嶺 勉
	野間三美子
磯長武雄追憶記	(三)
山茶花推薦歌	(三)
平山 朴	二階堂元夫
津曲 そえ	吉滿 信
	小菌 定實
	川崎 初枝
	深井 冷子
	和田 静子

磯長武雄氏の横顔  
佐多時代の磯長氏  
山茶花詠草

松之内健一	奥 武雄	中原 圭相	川原田 實
宮原 正徳	松本 英子	大澤 敏子	大内山喜三郎
佐々木勇良	久多島亮二	湯田 秀嶺	池田 重治
上山 義雄	長 厚志	前原 篤夫	猪俣 孝子
村田 文彦	神田由紀子	内野婦知恵	松下 あき
外蘭きくえ	佐伯 敏子	高崎 實枝	竹田志満子
木山 シマ	持橋 慶治	本野 友保	宮原 繁喜
濱田 あき			

秋懐の記  
追想の記

山茶花詠草

江口 天朗	石牟禮夢草	柳田善之介	石川 益男
丸谷 重次	西園 はま	天満 僖子	福永 ふき
小川ふくえ	喜多川千秋	木島 申夫	萩原 千恵
吉川 弘成	春日 和也	岡元健一郎	
惜しき人を			野田 三美子 (四)
感吟贅註			吉田 英夫 (四七)
山茶花短歌			(四八)
木島 冷明	横山 清行	山上 博史	山内 榮藏
樋渡 清一	谷口 午二	富永 京村	吉嶺 勉
池畑 盛義	丸野 彌堅		
今日の話題			前原 東作 (五)

歌壇時評……………同 (五)  
磯長武雄氏追慕記…………… (五)

小園定實 中村隆俊 吉川弘成

銀芒會亡友録……………牧野一男 (六)  
編輯便・新社友・消息…………… (三)

III 雑誌記事

・「歌壇の動向」〔鹿児島教育〕昭和八年九月號 所収)

・「阿蘇行を評す」〔山茶花〕昭和九年三月號 所収)

・「山茶花人國記」甲南歌客〔山茶花〕昭和九年五月號・六月號・七月號 所収)

注 「鹿児島県国語教育史 (VI) —— 磯長武雄研究ノート I」

〔教育学部研究紀要〕第40卷 所収) において論及したように磯長武雄はいろいろなペンネームを使っていた。甲南歌客もそのひとつと思われる。

・「前月號随感」〔山茶花〕昭和十一年九月號)

・「銀七より 昭和七、八年度の業績を見る」〔山茶花〕昭和十一年九月號)

・「歌壇展望」——『アララギ』十二月號評〔山茶花〕昭和十二年一月號)

・「歌壇展望」——『蒼穹』一月號評〔山茶花〕昭和十二年二月號)

・「歌壇展望」——武都紀・ひくのに二月號評〔山茶花〕 (昭和十二年三月號)

・「歌壇展望」——『日本短歌』三月號評〔山茶花〕昭和十二年四月號)

・「雪は裂ける」を観る〔山茶花〕昭和十二年五月號)

・「歌壇展望」——『短歌研究』四月號評〔山茶花〕昭和十二年五月號)

・「前月推薦歌評」〔山茶花〕昭和十二年六月)

・「歌壇展望」——金雀枝・東邦六月號評〔山茶花〕昭和十二年七月號)

・「歌壇展望」——第二回五十首募集短歌評〔山茶花〕昭和十二年八月號)

・「歌壇展望」——『潮音』九月號評〔山茶花〕昭和十二年十月號)

- ・「歌壇展望——『多摩』十月號評」（『山茶花』昭和十二年十月號）
- ・「歌壇展望——昭和十二年の回顧」（『山茶花』昭和十二年十二月號）

・「前月號詠草抄寸言」（『山茶花』昭和十三年一月號）

#### IV 磯長武雄の思想およびパーソナリティに関わる文言

1 「我々の讀むべき指導書は高師訓導の著書でなければならぬといふ時代は尠くも綴方教科に於ては過去に属する。教育は肩書きがものを言ふのではないのだ。實踐が何より證明するのである。今はさういふ時代である。」（『綴方實踐の開拓』『鹿児島教育』昭和十一年十二月號 九三頁 所収）

2 「『山茶花』誌上に於ける先生の短歌論と、『綴方學校』その他に於ける先生の綴方理論とは常に雁行し、同じ生活精神の上に立つてゐた。しかもその實踐の強烈さ健全さは人のつぶさに知る所であつた。」（『磯長武雄先生を憶ふ』吉嶺勉『山茶花』昭和十三年十二月號 十八頁 所収）

3 「當時氏は兒童教育上の教材に短歌を取入れ相當な効果を擧げて居らるる様であつた。」（『佐多時代の磯長氏』横山清行『山茶花』昭和十三年十二月號 二七頁 所収）

4 「人間一切の表現が人格の反映である限り、短歌も一つの人格であると考へてゐた。」（『武雄歌論序説』前原東作『山茶花』昭和十三年十二月號 六頁 所収）

5 「現實に即し、生活に即しつゝ、詩精神の高揚といふ言葉に共鳴を表し現實を現實のままに表現するのでもなく又理想を理想のままに歌ふのでもなく、現實の中の自分を見つめてそこから立ち上らうとするより高い自分を歌ふといふやうに解釋して、のではないかと思ふのである。或は現實を高めようとする浪漫精神——それが作歌の根據であるといつても差支えなからう。我々の短歌は我々の生活を切り開いて行く強靱な耕具でなくてはならない。随つて新たな熱意を傾けて、しかも積極的に前進して行かねばならぬ。」（『武雄歌論序説』前原東作 4と同じ 七頁 所収）

6 「磯長武雄氏の主張する處 生活短歌の樹立・短歌に於ける知性の導入・創造性、個性の尊重・短歌に於ける大衆性・現實的詩精神の高揚より發する正しき行動精神——（略・引用者）——故に磯長武雄氏は懷凝に溺れること、論理に溺れること、感覺に溺れることの絶対に無い人である。磯長武雄氏は驚く程健康な精神の持主である。」（『故磯長武雄氏の横顔』東田喜隆 4と同じ 二四頁、二六頁 所収）

7 「次に作品の題材を見ると、農村的な色彩がはっきり表はれてゐるとはいへない。『夕方』『僕のシース』『早起』『足さんの勉強』

『げた』『秋』『うちのこねこ』『銀紙』『思ひ出』『覺悟』といふやうな題材は一瞥して、自分自身の生活に對する認識が希薄なことを示している。ところが、尋五の作品の中にある『紡績きもいり』や『馬買の人』といふ題材は農村的なものであつて、題材それ自身兒童の性格の現實性が濃厚に感ぜられる。指導の手が兒童の生活の内部まで及んでゐることが表明されてゐる」(『兒童詩文集展望(6)』横手謙作『鹿兒島教育』昭和十二年二月號 所収 八〇頁)

注、横手謙作は磯長武雄のペンネーム

### 8 「磯長

第一首の かへりきておもき鎧を脱ぐごとくわが仕事を壁に投げかく はい、ぢやないか。『おもき鎧』とはやったな。眞のプロレタリアの意氣込を感じる。これは傑作だよ。」(『山茶花』昭和六年十二月號)

### 9 「磯長

僕はこれらの作品を詩として認めるに吝かではないが、第三者が見たら、どう批判するだろう。露骨に云つて見るとブルジョアの崩壊相を歌つてゐるに外ならないのではないか。」(『山茶花』昭和六年四月號)

注 これらの作品とは次の短歌を指す。

通り駕籠白刃の闇に投げ出して一目散に逃げし駕籠かき

何の樹の繁みか闇を揺さぶりて雨止むらしき雲切れの里

10 「磯長氏はまことに疑ふことなく生活を言ひ知性を論じた。

(略……引用者) 私は疑ふことをせぬ磯長氏の健康性をいまいましいとさへ考へた。(略) 磯長氏は疑ふことなく生活を言ひ知性を論じ浪漫精神を考へたが故にその個々の聯關については整理しきれぬものが残されている。それらすべてを總括するのが氏の好みの言葉「人生の眞實探求の精神なのである。」(『秋懷の記』吉田英夫『山茶花』昭和十三年十二月號 所収 三五頁)

### V 磯長武雄の論文が掲載されている可能性のある文献

(『山茶花』昭和十三年十二月號 磯長追悼号 より拾い出した。)

「綴方學校」・「教育・國語教育」・「綴方教育」・「綴方俱樂部」・

「工程」・「生活學校」

「綴方教育實踐叢書」・「讀方教育實踐叢書」